
司馬懿仲達の憂鬱

墮落論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

司馬懿仲達の憂鬱

【Nコード】

N2154Y

【作者名】

墮落論

【あらすじ】

しまだ ひさし

司馬田尚志は冴えない中年オタ、離婚届を提出した帰りに普通じゃない事故に巻き込まれてしまい死を迎えるが、その普通じゃあない事故の張本人によって自分が書いていた二次小説の元になる世界に転生させられてしまう。

自分が知っているゲームとは微妙に違っている世界……でも自分が知っているキャラ達は多数登場する世界…姿は若者、精神は親爺の主人公の明日はどっちだ

プロローグ（前書き）

この小説はオリキャラ主人公&筆者の観念世界での話と言う事で、その辺りが苦手の方はご遠慮して頂いた方が良いかとは思われます。それでも良いよ。という優しい方はお目汚しかとは思われますがお付き合いくださいませ。

御批評、苦言応援等ございましたらどんどん頂けたら幸いです。皆様からのコメントが筆者の成長につながります。皆では拙い物ではございますが宜しくです。

ブローグ

「司馬田さあくん、司馬田尚志さくん……」

事務的な声が部屋に響く。ここはうどんで有名な某地方都市の市庁舎の市民課である。

司馬田と呼ばれた男は年齢は40半ばであろうか、くたびれたスーツ姿で、何処か人生に疲れたと言う表情で先程名前を呼ばれた窓口に向かい、係りの者から書類の様な物を受け取る。

受け取った書類を、これも書類発行の際の料金を払う時に一緒に受け取った市庁舎の名前入りの封筒に入れながら、彼は一階ロビーを通り抜け玄関から外に出る。

市庁舎から退出し駐車場に置いてあった車に乗り込みネクタイを緩めると車を発進させた。

「はあ〜っ……」

市庁舎前の交差点で信号に捕まった彼は大きな溜息を一つ吐き、カーステレオのCDトレイから半分ほど顔を出しているCDにチョンと触れた。少しの間を置いてカーステレオからはいつも好んで聴いている80年代ポップスが流れ出した。

「婚姻届を出した時もあったんですが、紙切れ一枚で簡単に家族になつたり他人になつたり出来るもんなんですねえ……」

青信号を確認し、まるで誰かに話しかけるかの様に独り言を呟きな

がら車を発進させる。

「さて……離婚届は受理されましたし後は午後から家裁で子供達との面談の日取りと養育費の相談ですか……どうせあちらは弁護士さんのみの出席でしょうから……気が重いですねえ……」

今日は休日となっっている自分の職場に向かいながら、車を走らせている途中に建っている地方裁判所を横目で見て心底ダルそうな口調で、また独り言を呟いた。

車内で今後の事を考えながら胸元から取り出したセブンスターに火を点けようとした時に、突然車のフロントガラス一杯に真っ白な鳥の羽根の様なものが拡がって視界を覆う。

「へっ……？　何なんですか……？」

驚愕で素っ頓狂な声を出した身に次に起こった事は、ドスンと何かが車のボンネットに落ちて来たかのような感覚

「えっ？　ええっ……？　うわあっ！！」

そして何が何だか分からずに、真っ白な視界を振り切ろうとして慌ててハンドルを切った直後、凄まじいまでの衝撃が彼の車を横転させる。その衝撃はシートベルトをしていなかった彼を、いとも簡単に車外に放り出して二度三度と路面にバウンドさせる。

彼は一度目の路面との接触で頭部を強く打ち、二度目三度めの接触では、衝撃で折れた肋骨が、どの臓器かは判別出来ないが刺さったのである。激痛に、自らの死を否が応でも理解した。

「何なんですか今は……………それより……………もう多分駄目でしょうねえ……………将太、愛香……………ごめんなさい……………お父さんは……………」

薄れ行く意識の中で子供達の事を思い浮かべる一方で、混濁する意識の中では

「ああ……………そう言えば部屋の掃除もしてませんでしたねえ……………床にはエロ本が散乱している筈だし……………パソコンも二次小説書きっ放しでシャットオフしてませんね……………」

どうでも良い様な事を考えつつ彼の意識は途絶えた。

プロローグ（後書き）

どうも墮落論と申します。

初投稿となりますがいかがでしたでしょうか？

今後とも細々と続けて参りたいと思いますのでどうか宜しくお願い致します。

プロローグ 2 真実

「……………せんか？ ……さん、……………さん」

誰かが自分に向かって話しかけている声に反応する様に意識が徐々に戻って来る。未だ混濁した意識ではあるが、先程自分の身に何が起こったかはハッキリと覚えている。

（取り敢えず声が聞こえると言う事は生きているみたいですね……………体の感覚が何か変な感じですが、まああれ程の距離をフツ飛ばされればねえ……………兎に角、生きてて良かったと言う所でしょいか）

だんだんと覚醒しつつある意識で彼はそう考えた後、ゆっくりと目を開けようとした時に、いきなりハッキリと声が聞こえた。

「まあ、そう考えたいのはヤマヤマでしょうが、残念ながら貴方は既に死んでいます」

「はいっ？」

唐突に聞こえて来た声に思わずゆっくりと開けようとした目を見開き、寝たままの状態で見回す。意識の片隅で何処かの病院の一室である事を期待していたが、淡い期待を者の見事に打ち砕く様に辺りは暗闇で覆われていた。

「此処は……………何処でしょうか？」

「まあ、貴方達の世界の分かり易い言葉で言うのなら『死後の世界』ってやつですかねえ」

呆然自失となった状態で口から出た独り言に、すぐさま答えが帰って来た事で、もう一度だけ目の動きだけで辺りを見回してみたが、先程から答えを返してくれる者の姿は確認出来ない。

「えつとお……何から聞いたら良いのか……取り敢えず私はどうなってるのでしょうか？」

通常時なら錯乱して喚き散らしてもおかしくない状態であると言うのに、今は現状把握を最優先するべきと考え直した結果。彼は場の空気を読んで最適な質問をした筈なのだが

「貴方……変な方ですねえ……大抵の人間は、こういう状態に陥ると著しい恐慌状態を引き起こすものなんですけどねえ……失礼ですけど貴方、生前に天然だとかズレてるとか、他人から言われてませんでしたか？」

返って来た答えがこれである。返答の際の生前と言う単語が妙に生々しく感じられたが、それはこの際置いておいて、彼は微妙に痛む頭で言葉を返す。

「確かに喚き散らしたい衝動はありますが……私としては出来るだけ今現在の状況把握をしたいが為の質問のつもりだったのですが、何かおかしかったでしょうか？」

「ふむ……良く言えば落ち着いている、或いは達観しているとでも言うのでしょうか……未だ天然ボケの疑いを捨て去る事が出来ませんねえ……」

「何か非常に酷い事を言われていると思うのですけれど、兎に角現

状の説明をお願いできませんか？ それを聞いた上で、錯乱して暴れるなり、絶望して泣き喚くなりしようと思えますので……」

「（やはり変な人にちいかいかも……）そうですね、客観的な事実を申し上げますと、司馬田尚志さん、貴方は不幸な事故でお亡くなりになりました」

「はあ……不幸な事故ですか……」

「はい、不幸な事故です。我々の主、貴方達が神と呼び崇め奉る御方が下界に降臨された際の、ちょっとした手違いに貴方が巻き込まれた形になってしまったのです……本当に申し訳ありません」

それまで事務的に話していた声の主の口調が事故の謝罪の際には悲痛さが感じられる声に変わっている事が、これは間違いなく真実の事であろうと彼を納得させた。

「そうですか……まあ人である自分には分からない世界の事ではありますが、主が降臨されたと言う事は余程の大事だったのでしょ
うね……」

「はあ……まあ……その……」

何故だか相手の口調が急に齒切れの悪いものとなってしまう事に、若干の嫌な気持ちを感じつつ先程より詰問口調で問うて見る。

「もう一度御聞きますが余程の大事で貴方の主は降臨されたんですよね」

「……………」

「何で無言になるんですか？」

「いやあ……あのお……大変言い難い事なのですが……今回我が主が此の地に降臨されたのは……そのお……貴方が言う様な大事では無く……えゝとですねえ……天界るるぶに掲載されている程の『さぬきうどんの店』に行く為だったんですよ……ハハハ……」

「はあああああああつ？」

事故の真実と声の主の渴いた笑い声を聞いた彼は、あらん限りの声を張り上げた後、あまりのショックの為にまたもや意識を失ったのであった。

プロローグ 2 真実（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』プロローグ2をお届けいたしましたが無駄な
ったでしょうか？出来るだけ早くプロローグを終了させて本編に入
りたいと思いますので今後ともどうか宜しくお願いします。

プロローグ 3 提示

「……っ、うつつ……うつつんっ……」

（何か悪い夢を見た様な気がしますね……うん、悪い夢です。神様つてのが居るって事は良しとしましょう……ですがその神様がうどん食べる為に降臨するなんて……何処の『聖 おに。さん』設定ですか……そう、これは夢です。此処の所離婚調停等で疲れていた私が見た夢なんです。ええそうに決まっています）

混濁する意識の中で、彼はそう考えて今度こそ本当の世界へと希望を抱きながら目を開けようとした時、

「いや、現実逃避をされるのは結構なんですが……何度気絶されても司馬さんが死んでいると言う状況は変わらないですよ」

宛ら全ての希望を打ち砕くかの様な声が聞こえて来る。何とは無く理解はしていたが、改めて突き付けられた事実に対して非常な理不尽を感じて声を荒げてしまう。

「何を他人事のように仰っているんですか？　そもそも貴方の主が、うどんを食べたいが為に下界に来なければ、今此処に私はいない筈じゃあないですか……！」

「まあその事に尽いては我々天界も甚だ遺憾には考えているのですが、我々は決して今回の不幸な事故を他人事などと無責任な事はちつとも思っていないですよ。それ故、事態収拾と事後協議の為に態々大天使の私自らが天界から派遣されて来たのですから、人の身でありながら光栄だと思って下さい」

「えーと……甚だ遺憾であると言う政治家の様な答弁とか、貴方が大天使であるとか、事故の張本人である貴方方が何故上から目線なのか等、ツツコミ所は多々有るのですが……………」

「それがどうかいたしましたか？」

言外に何か文句があるのかとでもいう雰囲気を漂わせた相手の言葉に彼は、もうどうでもよくなってきて投げ遣り気味に言葉を返す。

「いえ、これ以上不毛な会話を続ける事は精神衛生上良くないって事だけは理解が出来ました……………で、事態収拾と事後協議と言う事ですが、結局私はこれからどうすれば良いのでしょうか？」

「ほう、御理解が頂けたようで幸いです……………もう少し錯乱状態で抵抗を示すかと思っていたのですが……………司馬田さんって、やはり少し人としてズレていませんか？」

「貴方は話を纏めに來たのか、私の事をからかいに來たのかをハッキリとさせた方が相互理解の為に宜しいのではないかと思います……………」

「いやいや、これは失礼致しました。でも突発的な事故でお亡くなりになったのに、此処まで冷静な方は本当に珍しいんですよ……………まあそれはさて置き本題に入りましょうか」

「やっとうですか……………あんまり前フリ長いとSS読者にソッポ向かれてしまいますよ」

「ハイ、其処の死人、メタ発言禁止!!」

「何で天界の大天使とやらがメタ発言なんて言葉知ってるんですかつ!?」

「まあ、近頃为天界は何でもアリですからね……と、言う訳で本題に入ります。突然ですが貴方には転生して貰います」

「はいいつ?」

「転生ですよ。テ・ン・セ・イ。分かりますか? 転生!! 貴方が望んだ世界に転生して頂いて、我々天界が付与したチート能力全開で「そりゃあもう大騒ぎさつ、イエーイ!」ってな具合で新しい人生を楽しんで貰おうと言う事で……オケ?」

「いやいや……オケ? って……そんな軽いノリで言われても、元の世界に生き返るって事は出来ないんですか? 私つい最近離婚が成立しましたんで将太に愛香、二人の子供達の養育費も払っていかなければならぬんですよ……」

「ああ……言い難いのですが生き返るのは無理ですね……だって貴方の遺体はもう茶毘に付されましたし、貴方が死んだと言う事をかなりの人が認識しているんですよ。それらの認識を全部書き換えて貴方の人生を再構成するなどと言うプチ創生なんて、ぶっちゃけ面倒くさいだけですし……」

「面倒くさいって……そもそも貴方達の手違いでしょうが」

「それについては重々申し訳ないとは思っていますが、実質貴方一人を生き返らせると貴方が死んでから以降に出生した新たな命を全て無かった事にしなきゃいけないんですよ……そんな悪魔の様な所

業を貴方は望むんですか？」

「ぐっ……」

「ですからここは一つ貴方に我慢して頂いて快く転生して頂けないかなあと、我々は思う次第でありまして…… 勿論転生した世界での身の安全及び快適なセカンドライフは天界が保証しますよ」

「二人の子供達の養育費は…… 私がそれを払えないとなると元妻と子供二人の生活の心配が……」

「それは無問題です！！ 貴方が御子さん二人を受取人に行っている生命保険ですが此方の方で手を加えておきましたので、毎月30万円程は奥さんの口座に入る様になっていますし、貴方の両親にも同額が振り込まれますよ」

「貴方はうちの家族を全員ニートにでもするおつもりですか？」

「まあそこは天界からの誠意と言う事で御納得を頂いて、如何でしょううか後顧の憂いも無くなった事ですし、ここは一つ快く転生して頂けませんかねえ」

そう言った声のトーンは大天使と言うよりは、自分が加入した生命保険のセールスレディに近いなあと、彼は現実逃避が半ば入った状態でぼんやりと考えていた。

プロローグ 3 提示（後書き）

どうも墮落論です。

『プロローグ 3 提示』を書かせて頂きました。

次回でプロローグ終了いたします。

今後とも頑張りますので宜しくお願い致します。

プロローグ 4 旅立ち

「はあっ……何と無く釈然とはしませんが、ここは黙って貴方の言う通りに転生した方が話が早く転がりそうですね……そろそろ本編に行かないと評価ポイントにも影響が出て来るでしょうし」

少々と言つた表情で尚志は大天使が言つた転生話に了承の意を示した。

「誰に向かつて話してるか……何て事は今更なので突っ込みませんよ。それよりもその答えは転生受諾と捉えても宜しいのですね」

「ええ、どのみち二度と子供達に逢う事が出来ないのであれば、この世界に未練は無いですからね……ところで私はどう言った世界に転生させられるのですか？ 先程の話ではチート能力の付加と身の安全は保障されると言われてましたが……」

「はい、我々天界が貴方の望む様な「俺様、T u e e e e e e
！」的な力を付与しますので、貴方自身が死ぬ羽目になる様な事は
余程の事が無い限り発生しませんよ。それでどの様なチートを御望
みでしょうか？」

「どの様な……と、言われましても、行く先が何処か分からなければ、能力の御願の仕様が無いじゃあないですか」

「ああ、それもそうですね……ではお教えしましょう。今回貴方が転生して頂く世界は……ズバリ『真・恋姫†無双』の世界です。どうです嬉しいでしょうヒューヒュー」

大天使と名乗る声は、そう言うと頭の悪いアイドル司会者の様に囁し立てる。

「あのお……」

「ん？ 如何しました？ 何か転生先に御不満でもございますか？」

「いや……不満と言うよりは、何故に『真・恋姫†無双』の世界……
…なんででしょうか？」

「えーっ、だって貴方の事を知る為に部屋を見に行かした織天使からの報告では、貴方の机上には恋姫のエロゲーに三国志関連の資料が散乱し、床には恋姫関連の同人誌、それに何よりもPCには貴方ぐらいの年齢の方が書くには、相当痛くてキモイ二次小説が書きかけのままだそうじゃないですか」

「い……い、痛くてキモイ小説……ですか」

「いやまあ、その辺りは個人の見解の相違って奴でコメントは差し控えさせて頂きますが……ここまでされるのであれば相当お好きなんでしょう、その世界が」

「あのですね……私は恋姫が好きと言うよりも、ただ単に恋姫が題目として案外書き易かったから書いてたんですが……」

「何ですって……では山と積まれた三国志関連の資料と床に散らばる18禁恋姫同人誌は？」

「まあ、いくら二次小説とは言え嘘八百は書きたくなかったんで、それなりに資料は集めましたし……後、18禁本は………単なる

自分の性的趣向です」

最後の方で尚志の声が小さくなってしまったのは御愛嬌と言ったところか。

「おやおや、これは困りましたねえ……我々は貴方の部屋の状況から鑑みて転生先は恋姫の世界しかないと判断したので、他の転生先など用意しなかったんですがねえ……」

「別に恋姫の世界自体が嫌いな訳では無いですから、其処に転生させて頂ける事については吝かでは無いのですが……」

「いやに奥歯にモノの挟まった様な言い方をなさいますねえ」

「いや、先程のチート機能の件なんですがね……転生先が恋姫の世界と言うのなら、貴方方が提案された「俺様、強ええええ!!」的な要素は私的には不要かなと思ったものでして」

「その訳は……伺っても宜しいですか」

「ええ、大した訳でもありませんからね……まあ何と言うか、恋姫のどの辺りに転生させていただけるか全く分かりませんが、乱世である事は間違いないのでしょうか？」

「まあ、そうなりますねえ」

「いくら転生者と言っても転生世界の摂理を無視した様な武力は、やがて自分や周りの世界を壊して行くように思えますよ。それならば超人的な武力などよりは知力や魅力の方を私は望みます、まあ何よりも私には戦場での縦横無尽の働きなぞ出来そうに無いですか

らね」

「ふむ……まあ、それが貴方の御考えであるならば重視させていただきますが……ならば貴方に対しての付加は統率力、魅力、知力、政治力……後は『主の祝福』と……」

「何ですか？ その『主の祝福』ってのは……」

「ああ、これは先程からの話に出ている貴方の転生先での命の保証ですよ。これがあれば何があっても貴方は死ぬ事はありませんし、勿論、大怪我ひとつ負わずに新たな人生を送れますよ」

「ん……」

「どうしました？ まさか貴方『主の祝福』までも要らないと言うのでは無いでしょうね！！ 貴方がこれから転生する先は乱世なんですよ！！ 貴方が考えているよりもずっと『死』と言うものが現実的な世界なんですよ」

「ん……確かにそうなんですしょうがねえ……チート機能付けて貰って言うのもなんですが、転生したら少しは前向きに生きようと思っんですよ……それこそ日々を一生懸命にね……」

「……………」

尚志の揺るがない決意に大天使は返すべき言葉を失ってしまい、暫し重苦しい沈黙が辺りを支配する。どのぐらいの時間が経ったであろうか、

「……………御考えは変わらない様ですね……………」

「ええ、折角の御好意ですが申し訳ありませんねえ」

「分かりました、出来るだけ貴方の御要望に沿える様に致しましょう。全く……やはり貴方は変な方ですねえ」

大天使の声は、そのものが天からの福音の様に神々しく辺りの空間に響き渡る。

「さてと粗方自分の要望は聞いて貰えるようですから、安心して新しい世界に旅立たせてもらいましょうか」

「まだ細かい所の説明やお伝えしなければならない事が多々有るのですが……」

「もう充分ですよ。それに……」

「それに……？」

「自分の新しい人生ですから、手探りで成長を感じていきたいじゃないですか。だからこれで充分なんです、さあ、早くあちらの世界へと送って下さい」

「やっぱり変ですよ、貴方……でも短い時間でしたが貴方とお話していて感じられた事は、今迄の遣り取りは実に貴方らしい……と言う事でしょうか、それでは司馬田さん、今一度目を閉じて下さい」

「はい……」

「ゆっくりと気を落ち着けて……はい」

不思議な事に尚志が目を閉じた途端に急速に尚志の意識は混濁して行き、まるで風呂にでも浸かっている様な感触に包まれる。大天使の声が徐々に聞こえなくなり、寄せては返す様な波の音に変わり自らに意識が完全に途絶える時

「将……太……愛……香………幸せ……に……」

それが現世での尚志の最後の言葉だった。

プロローグ 4 旅立ち（後書き）

どうも墮落論です。

『司馬懿仲達の憂鬱』プロローグの最終回を書かせて頂きました。
書きながら思ったのですが、オリ主と大天使の口調がモノの見事に
被っちゃってますねえ……（苦笑）

さて次回からやつと本編です。精一杯頑張って書きますのでどうか
宜しくお願いします。

司馬懿 VS 曹孟徳 前半戦（前書き）

どうも、墮落論です。

今回は試験的にオリ主目線って奴で書いてみました。

読み難い所も多々あるでしょうが一時でも楽しんで頂けたら幸いです。

司馬懿 VS 曹孟徳 前半戦

えゝ、『司馬懿仲達の憂鬱』を読んで頂いる皆様、御久し振りです。故あつて恋姫の世界に転成致しました、司馬田尚志改めまして司馬懿仲達です。

何故いきなり私がメタな発言なのかと言いますとですねえ、実は、司馬家の長男として、この『恋姫』の世界に生を受けてから既に18年近くも経つちゃってるんですよえ……

ぶっちゃけ幼少時の頃の事など本筋を進めるにあたつて邪魔以外何者でもないですし、特に40ノ才の思考を保つたまま我が母『司馬防』（恐らく私を生んだのは20歳になるかならないかの時期でしょうか……）の豊かな胸に顔を埋めて一心不乱に母乳を飲んでる姿など、二度と思い出したくない程のトラウマなんですよねえ……しかし、母乳ってあんまり美味しいものではないんですねえ、あれをプレイにしている人達って一体どういう人種なのでしょううか？

まあ、それはさておき……転生した先が『司馬家』だと理解した時には「名字繋がりのなかっ！」とか「司馬懿だとしても登場時期が微妙……」とか思ったりもして此処は本当に『恋姫』の世界なのだろうかと色々疑いましたが、自分以外の『司馬の八達』が全て女性だと判別した時（末妹の司馬敏が生まれた時ですが……）に、やはり此処は『恋姫』の世界なのだと妙に納得したものでしたねえ。

取り敢えず此処に転生する前の御約束事であつた能力に関してですが、自分の要望通りの知力や魅力を与えてくれたようでして、司馬家の一男七女の中では博覧強記・才気煥発とのお褒めの言葉を頂くほどでありまして、魅力の方もそこその様です。

が、しかし武の方に至っては末妹の司馬敏（現在8歳、本当に可愛いんですよこれが……）からも「兄上、もっと武芸に励まなければ御自分の身も護る事が出来ませぬ！」と、強烈な打ち込みを喰らうほどの体たらくなんですよ……トホホ

ああ、後、幼少時の思い出と言えば、あまりにも家族や使用人達に至るまでに厳格過ぎる両親に対して司馬朗姉上と二人で家庭内闘争を試み、一年余りを掛けて、明るい家庭内環境と妹達の自由な人生を勝ち取った事ぐらいですかね……

えっ？ 当時の教育的な考えは儒教であって親に反抗するのは駄目だろうって？ まあ確かに両親に対する反抗など儒教での孝悌に於いてはとんでもない事なのでしょうが、それ以上に家族（司馬家で働いてくれている使用人達も広義では家族です）の間に厳格などと言う己の力の誇示の様な壁を創る事に対して私は我慢が出来ませんでしたからね。

ただ勘違いして欲しく無いのは、私個人として儒教をこの時代の儒者の様に妄信していないと言うだけであって、基本的に儒教は人の行動の原理ではあると思っていますのですよ。最も儒学者なんてものには絶対になりたくは無いですかね……

まあそんなこんなで、この『恋姫』の世界に生を受けて18年近くまったりと生きて来た訳ですが、先年の春に母上が洛陽での治書御史に任じられ一族郎党を引き連れて引越してきた際に、姉上と私も半強制的に出仕する事になり、姉上は母上の手伝い、私は何故か母上の御友人で三公の司徒であられる袁隗様に気に入られ、袁隗様の秘書の様な仕事に付いております。

秘書と言っても公的な職務における秘書は朝廷から任じられている方がいらっしやいますので、私の仕事は袁隗様のプライベートに関する事が主であり、どちらかと言えば袁隗様の政策立案であつたり、洛陽の都市計画の発案をしたりする事のほうが多いんですが……勿論正当な国からの賃金など出る筈も無く、私の給料は袁隗様の私費から出されているので元居た世界で言えば私設秘書兼ブレーンの様な扱いですかね。

「……………と、言う訳で、以上、転生してから現在に至るまでの事情説明を終了させて頂きます」

「仲達……貴方、先程から私の問い掛けを無視して、誰に向かってブツブツと独り言を喋っているのかしら？」

ここは宮中にある資料庫に隣接する閲覧室。私の様な下級官吏ではない者が立ち入れる様な場所ではないのですが、上司である袁隗様の御好意で後漢建国以来の政治的資料を閲覧させて頂いています。先程から私に喋りかけて来ているのは誰あろう曹孟徳、真名は華琳『恋姫』の世界では一番の有名人が私の眼前で腕を組んで座られています。

何故に霸王曹孟徳の様な方が未だ一般庶民と大差ない私に話しかけているかといえば、猛徳さんが孝廉に推挙された折りに洛陽北部都尉に起用したというのが我が母であり、その縁から何かと親しくして貰っている訳なんですよ。

しかし妄想世界の住人であるとはいえ、流石に曹孟徳です。ただ、座して話をしているだけなのに、この覇気に満ちた威圧感は一瞬だと思えます。幼少の頃の我が母の質実剛健な威圧感もかなりなものでしたが、眼前の少女が発するそれも、勝るとも劣らぬものを感じられます。……唯一つ我が母と違う所は、まあ、母性の象徴である体の一部分が我が母と比べると慎ましかで残念だと言う所ですか……

「仲達……貴方、私を無視した上に失礼な事を考えているようだけれど……一回死んでみる？」

「いやいや、孟徳さん、人の心の内まで読めるなんて貴女こそ一体何処までチートなんですか。それと危険ですから絶をこんな場所で突き付けしないで下さい。確か宮中には武器は持ち込めない筈なんじゃないかったですよね？ ……ハアッ、しょうがないですねえ、あまり調べ物の邪魔をされたくは無いですからねえ。」

「私は別に孟徳さんを無視している訳じゃありませんよ、必要最小限の返事はしているじゃあないですか。それに孟徳さんの所への仕官の話ならば、もう何度も断っている筈だと思いますが……」

「ええ、確かにもう何度目かも分からない程、悉く仲達には仕官の話を通され続けているわね」

「でしょう……いくら治書御史の息子だからと言っても、私の様な小物に何故そこまで拘るんでしょうかねえ？」

「仲達……貴方、自分の事を小物だなんて本気で思っているのかしら？」

「ええ、思っていますよ。私には袁家の様に誇れる様な家柄も官位もありませんし、孟徳さんの側に侍る元讓さんや妙才さんの様な際立った武など持ち合わせていませんし、多少の得意分野である知の方も実際に何かに使用したと言う訳でもないのですねえ……」

「まあ良いわ、ならば仲達、貴方に一つ確かめたい事があるのだけれど、貴方、一応は司徒の袁隗様の書生と言う事になっているのよね。でも実際の所はそれだけに留まらず政策立案や、この洛陽の区割にまで進言をしたって言うのは本当かしら？」

「ああ、その事でしたら確かに先年の初夏の頃に袁隗様から直々に気付いた事があればと言う事でしたので差し出がましい真似とは思いましたが、私の考えを述べさせては頂きました。しかし進言などと言う様な公式なモノでは無かったですし、あれはただ単に私の能力試験の様なものと記憶しているのですがねえ」

確かに袁隗様の御側に控える様になって一月ほどたった時に、袁隗様から洛陽の都を見て感ずる所を申せとの御達しで意見書の様な物を提出はしましたが、あれから四季を巡っても洛陽の都は殆ど何も変わっていませんので意味は無かったと思っていたのですが……それよりも孟徳さんは何故そんな事迄御存知なんでしょうか？

「その時に提出したのは、この竹簡の事なのかしら」

そう言う孟徳さんは、その残念な胸……ゲフンゲフン……いやいや懐から竹簡を取り出して私の方へと広げました。

「ああ、これですね。しかし袁隗様がお持ちの筈のものを、孟徳さんが何故持っているのでしょうか？ まあ最も何一つ政策や意見が取り上げられていない点を思えば、袁隗様の眼鏡に適わなかったと

言う事でしようが……」

まあどうせそのぐらいの扱いでしょうと元々思っていましたから、別段気にも留めていなかった竹簡を手にとって見ると所々に朱筆で添削されている事に気付きました。

「仲達、私は人材を見極める目は、他の誰よりも有るつもりよ。その私が見ても貴方の政策は、今迄見て来た他の政策案のどれよりも具体的に理に適っていたわ。袁隗様も何度も貴方の意見を上奏しようとしていたのだけれど、その度に頭の堅い内朝の宦官達に握り潰されていたのよ」

「はあ、まあ中常侍のお歴々には御自身達の既得権の問題が絡んできますから、私の意見は、例えば袁隗様が上奏されたとしても、まず取り上げられる事はないでしょうねえ」

何時の世にも改革と言うものには、それ以前の旧弊にしがみ付いて利益を得ている者達の反対がある事は理解していますので別段憤る事では無いですね……言外にその意を含んで孟徳さんに返答したのですがその答え方が彼女の気に障ったらしくて、彼女は声を荒げて「貴方はあれ程の件策案を握り潰されて悔しく無いのっ！ いえそんな事よりも、あの様な愚かな臣共を畏れ多くも靈帝陛下の御側近くに侍らせておく事に危機感を持たないのかしら」

「孟徳さん、ここは宮中ですよ。誰かが何処かで耳を敬ているかもしれない場所で、その様な物騒な事を言い出すのは感心しませんねえ」

「あら、私は誰に何を聞かれても一向に構う事はないわよ」

「いやいや、私が……と、言うよりは袁隗様の御側に控えている私の立場が困るんですよ。こんなことで帝を蔑にする様な話の一端に加担していたと言う事になれば、私に目を掛けてくれている袁隗様の顔を潰す事になってしまいますから」

「私は、その袁隗様から貴方の事を頼まれているのだけれど」

「はいいつ………？」

孟徳さんから放たれた思いもよらない一言は私の思考を急停止させるだけでは無く間抜けな声をも口から出させました。

「袁隗様は、貴方は自分の手元に置いておくには余りにも宝の持ち腐れであって決して貴方の為、延いてはこの国の為にはならないと、かと言って他の凡庸な者に貴方を預けても結果は同じ事。ならばいつそのこと私の下で貴方の才を自由に使わせてやって欲しいと仰られていたわよ」

「袁隗様が……私の才を自由にと……」

「そうよ、司馬懿仲達。貴方の様な才ある者は、私の下でその類稀なる才を充分に発揮すべきだわ。幸いにもこの末には私は陳留刺史として任地に赴く事になるわ、貴方も知っての通り私の配下には春蘭や秋蘭の様にごく一部の者しか大任を果せる者がいない。内政を司る優れた文官は喉から手が出るほど欲しいのよ」

孟徳さんの覇気に溢れた力強い視線が、私の事を射抜くように見据えます。正直言って、あの曹孟徳に必要とされている事実が私を逡巡させたのですが……

「孟徳さん自らの折角の御誘いですが……」

「やはり、貴方はこの洛陽に残ると言うのかしら？」

「はい、本当に申し訳ないのですが……」

「理由を聞かせて貰えるかしら、仲達」

「理由ですか？　そうですね……　まず貴女の仰る人材不足の件ですが、これは貴女が陳留刺史になれば、その問題は解決すると思います。何故なら今後数年の内にこの国は未曾有の大危機に陥るでしょう。そうなれば在野にいる私よりも優れた人物は先を争って貴女の元に馳せ参じる事になるでしょう」

「その根拠は？」

「まずはここ数年来の飢饉による食糧不足の所為で農民達はもとより一般庶民に至るまで現体制に対する不満で満ち満ちています。特定は出来ませんが今後各地で武装決起が頻発する事は火を見るより明らかです。一方朝廷側でも禁軍として派兵は行うでしょうが、それでも禁軍が勝利を掴めるのは最初の内だけでしょうね」

「それは何故かしら？」

「単純に言つて、数の暴力ですよ。現行の体制に改革が見受けられない限り、庶民の不満は天を衝くほどになって生まれた土地を棄てても禁軍に抵抗が続けますよ。ならば数が膨れ上がって行くそれらの者に対して動員に限りがある禁軍、さてどちらが有利であると孟徳さんは御考えですか？」

「朝廷だとして無能の集まりでは無いわよ。各地の諸公に対して禁勅を出して兵を動員するし、義勇軍だって各州や郡で結成されるわよ」

「そうですね……その事こそが自分達の首を絞めている事にも気付かず禁勅を乱発するでしょうね。禁勅を乱発した結果、各地の力を持った諸公達に結果的には大きな力……具体的に言えば軍事力と発言力を持たせると同時に朝廷の力の低下を諸公達に吹聴する事になるんですが、考えてみればみるほど馬鹿らしい話ですね。そもそも国家と言うものを自分達の独占物と勘違いしだす輩が帝の側に多いからこの様な事態に陥ろうとするんですよ。あくまでも国家と言うものは其処に暮らす国民たちの物であって帝の所有物でも無いのですし、ましてやごく一握りの特権階級の方達のものでは絶対に無いのですから」

私の答えを孟徳さんは興味深そうに聞き入った後に含みのある笑顔で私に向かって言いました。

「先程、私が貴方に咎められた言葉より危険な思想を熱弁しているわよ、仲達。でも中々貴重な意見を聞く事が出来たわ……ところで貴方が言っていた有能な人物が私の下に集まると言った訳をまだ説明して貰っていないのだけれど」

「そんな事、誰に問うても同じ答えが返って来ると思いますがねえ……今後この大陸に数多の諸侯が玉石混淆して台頭して来ると思われますが、五年、いや十年後を考えれば大部分は淘汰され、生きて名を残す諸侯は五指に余るか……在野の賢人や一騎当千の武人達は息を潜め事の推移を見守っているでしょう。その者達が最終的に誰を選ぶかなど考えるまでもありますまいに……」

そう言った私は孟徳さんの顔をじっと見つめました……いやあ本当に整った綺麗な顔立ちですね。つつい仕官の話を承諾してしまいそうない魅力なお嬢さんですよ、貴女は……でも未だ北郷一刀君が何処に現れるかがハッキリしない内に、私は貴女の所に仕官は出来ないんですよ。それに洛陽にはまだまだ私がやっておかねばならない大きな仕事が残っていますし、未だ私の待ち人が天水から上洛をしていませんのでね……

司馬懿 VS 曹孟徳 前半戦（後書き）

うーん、オリ主目線って難しい……説明文なのか心の内の言葉なのかの区別がつけ難い……まだまだ勉強しないとなあ……

と、言う訳で次回は後半戦です。もう少しだけでも上手く書ける様になれば良いなあ……墮落論でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2154y/>

司馬懿仲達の憂鬱

2011年11月18日15時30分発行